カントに於ける「取り残された」空間の諸問題

青木　茂

はしがき

カントに於て時間と空間が直觀の形式であり、其の觀念的性格の發見がアンティノミー解決の爲の「偉大なる光」[註一]であつたといふことは、批判前期に於て、先づ空間概念の究明を手引として進められ、時間は空間との類推によつて規定せられてゐる。然しながら我々が「認識」といふ場合、それは意識に於ける働きを豫想するのであつて、與へられたる無限なる空間も、時間の次序に從つて取入れられ綜合されてゆくのであり、自我の立場に立つて其の働きの一たる認識を其の超越論的な性格から見れば、空間に對する時間の優位を認めなければならないであらう。其のプロセスは一七七〇年就職論文（可感界と可想界の形式の原理）を通じて「純粹理性批判」感性論及び分析論に於て具體的な展開の跡を辿つてみることが出來る。[註二]

然しながら一方、空間はそれ自身に於て一ケの根源的直觀であり他からの導出によつて可能なのではない。唯一無限なる空間の持つ全體性はあらゆる個別的空間を、其の制限として成立せしめる根源的表象であり、實體の共在から抽象されたものではなく、却つて、共在をそれに於て可能ならしめる實體結合の可能性の形式的根據であり、我々が自然を、從つて、經驗を（特に質料的）考へる場合に缺くべからざる根本的制約である。それは感性の根源的形式と

呼ばれる。(Kr. d. r. V. II Aufl, S. 58. 以下略記 (B. 58))

時間が單に自然的時間として量化され空間的な直線表象によつて示され得るに止まらず、却つて根源的直觀として自我の純粹なる働きに卽して考察せられると同じ樣に（否寧ろ全く對比的に）空間は單に時間の繼次的綜合をまつて始めて認識せられる以前に、それ自身與へられたる無限なる表象として一つの全體であり世界の一體といふことは一なる空間に於てのみ可能である。[註(3)]

空間は意識（非空間的）[註(4)]とは全く異質的であり「互に外」といふ空間表象は、不可逆的な時間表象に反して可逆的であり、實體の共存や交互作用の可能性の根據であり自然的因果律の連鎖に於ける外的原因の表象可能の制約でもある。そして實體は人格的自我（デカルトとは全く異つた意味に於て之はカントに於ける精神的實體と呼び得るものであるが）とは全く異つた空間的な持續體であり、それと人格的自我たる精神的實體との混同は嚴密に禁ぜられる。それはカント自然觀のメカニズム的徹底であると同時に、合理的心理學に對する批判を準備するものである。

此の事は逆に言へば、カントが自然と言ひ世界と言ふ場合、それが單に形式的ならぬ質料的意味を有する時には、空間は却つて時間に對してある優位を持つに至ることを示してゐる。當初平行的に論ぜられ、人間認識（それは意識に於ける働きを豫想するが故に）の分析や記述を主とする分析論に於て、時間論へと其の優位性を偏向せしめた（認識論の中心である圖式論が又時間論であることに注意せよ）カントが、自然の原則論（特に經驗の類推）以下に於ては時間は寧ろ客觀化空間化せられ、時間の持續は空間に於て表象された實體を基礎として成り立ち、交互性の時間樣相たる同時といふことは、空間を根柢とする事物の共存を豫想して始めて可能となる。又世界についての客觀的實在性が、我々の外なる空間に於て成り立ち、內的經驗は是等をまつて始めて可能になると言ふカントの考へは、觀念論論駁に於て、外界が單なる假象であるとのバークリ流の觀念論に對抗せしめるものである。

空間と實體の問題は、青年期の著作より批判期を經て、晩年に到るまでのカント思索の中心的テーマの一つであ

る。空間は其の場合、神的遍在の現象（所謂 virtuelle Gegenwart）[註(5)]として説明される。それ故固有なるものとしての空間は時間的事象とは無關係な無時間的性格を擔ふ。恰かも神が變化する時間の系列の中に組み入れられざるが如くである。「空間のあらゆる部分は同時に無限に存在する」（B. 40）とカントが言ふ場合、此の同時とは時間系列とは何等關りなきものである。此の様な空間はその固有なる形式と、働きを全く拔にした受容的性格に於て、それ自身全く無時間的であり、從つて時間の如く系列を作らずして集合（アグレガーツム）であり其の秩序は從位的ではなくして同位的である。（B. 439）時間が繼次的な流轉であるに反して空間は不動に且つ持續的に限定される（B. 291）のであり、これは又全く我々の外なるものとして表象せられる。

註(1) M. Wundt, Kant als Metaphysiker, S. 158.

註(2) 拙稿「カントの時間論」（「文化」第十六卷第二號所載）參照

註(3) 一七九一年ベルリン、アカデミー懸賞論文參照 Cassirer Aufl. VIII. S. 266 ff.

註(4) 批判前期に於ける實在的空間の否定、靈魂（ゼール）又は意識の場所としての非空間的なるものの發見等に關してはハイムゼートの Metaphysische Motive der Ausbildung der Kritischen Idealismus. (Kantstud. 1924. S. 121 ff.) に精しい分析がある。

註(5) E. Adickes, Kants Opus posthumum. S. 233.

アプリオリな形式としての空間をまつて始めて經驗的な實在する空間は可能とされる。卽ち空間は所謂「外感の形式」として、ある意味に於て働きを持つと言はねばならぬ。「空間の形式」が持つ此の様な意味はあく迄保持されなければならない。此の點に就いては、特にカッシラーやコーヘンのすぐれた解釋があげられる。[註(1)] そしてアプリオリな形式の意味に於ける空間は心理的諸表象に對し、論理的に先行し其の意味に於て根源的であるとも言ひ得る。然もコーヘンやゲント、更にトゥレンデレンブルグ等[註(2)]も指摘する様に、カントの空間論の中には經驗的乃至心理的見地が多分に混入してゐることは否定し難い。此の様な空間概念の規定はデカルトによつて始められ、就中バークリによつて

徹底されたものであるが更にニコライ・テテンスによつて受け繼がれ、その時間空間の平行的取扱ひと共に、カントに直接の影響を與へたであらうことは見易き事柄である。又カント空間論の形而上學的側面を示すものとして、その純粹空間の思想とマルブランシュの叡智的延長の觀念とを比較し其の構造に或る種の連關を見出すことも不可能ではない。[註(3)] カントに於て空間は先づ與へられたる無限なるものとしてあり「與へられる」といふ原初的な空間の性格は單に論理的形式的意味にのみ解消し盡されないものを持つてゐる。卽ち此の樣な空間のあり方はコーヘンやカッシラーの言ふ Werkzeuge 又は Ausbildungsmittel としての空間であるよりは、寧ろ與へられたる現象としての多樣であり「それに於てある」といふ意味に於て常に多樣の根柢に豫想されなければならない。

取り殘された空間の問題とは、それ故直接的には此の樣な（コーヘンやカッシラーの解釋の如き）悟性の綜合と同一視された空間に對する純粹直觀としての空間の持つ根源性の主張であり、その成立の根柢に認められる形而上學的側面の摘出であり、更に空間の質料的あり方の意味の追及である。空間は思惟の繼次的な綜合に對し、質料としての意味と及び其の面に於ける統一としての意味を持つてゐることを忘れてはならない。

時間はカント認識論に於て、單に現象たるに止らず悟性と共に構想力として働き、統覺の根源的統一作用と結びつく可能性を有してゐる。そしてカント認識論が意識一般としての統覺をその可能性の樞軸とする限り此の取り殘された空間は統覺とは對比的に全く働きを拔にしたものと考へられる。此の樣な空間の所與的なあり方は認識に於ける受容的性格を示す側面として、一方に於て物自體の能動的作用との連關に置かれる。從つて質料に關する自然一般が如何にして可能であるかが問はれる時、我々は感性が物自體との相應に於て受ける觸發といふことを前提せざるを得ない。[註(4)]

註(1) E. Cassirer, Das Erkenntnisproblem in der Philosophie etc. II. S. 683 ff.

H. Cohen, Kants Theorie der Erfahrung. S. 83 ff.

註(2) W. Gent, Die Raum-Zeit-Philosophie des 19. Jahrhunderts, S. 57.
A. Trendelenburg, Historische Beiträge zur Philosophie, III, S. 215.

註(3) カントに於て意識の中に取入れられる外界は直接には物自體として不可能であり、それが良々に認識可能とされる爲の形式的制約として純粹直觀としての空間がある。マルブランシュの場合も同じ樣に外界の直接認識は否定され、精神は唯叡智的延長 (Ut tendae intelligibile) の觀念を介してのみ外的事物を認識する。此の構造上の類似はブッヘナウ及びゲントにより指摘されてゐる。
A. Buchenau, Über den Begriff des unendlichen intelligibeln Ausdehnung bei Malebranche und die Beziehung des letzteren zur Kantischen Raum-Begriff, (Kantstud, 1909, S. 440 ff.)
W. Gent, Die Philosophie des Raumes und der Zeit S. 166, S. 261.

註(4) vgl. Prolegomena § 36

人間の認識の制約のもとに考へられた世界とは數學的な法則のもとに立つ世界である。そしてカントは數學を根柢にして、「如何なる特殊の自然論にあつても、其の中に數學が見出される程度に於てのみ眞の科學が見出される」と主張する。(「自然科學の形而上學的基礎」序言) 幾何學的空間は結局認識主觀の構成に於て成り立ち(註(1))、又成り立ち得る所に其の妥當性の根據が存するのであるが、それは又物質の無限可分性(同上第二部定理四 を介して自然にも確實に適用され、斯くして純粹直觀としての空間の超越論的觀念性は、其の經驗的實在性を始めて可能なものとするのである。此の事は以下の諸問題に對するカント的前提として充分に認めなければならぬ。それ故「空間の根源的直觀に於て與へられるとは別種の直觀を考へることが可能でもあるかの樣に、そして此の空間を充すことによつてのみ可能なるあらゆるものに對して空間のアプリオリな限定が同時に關係しないかの樣に」(B. 168) して主題の空間が論ぜられるといふのではない。

現象の總體としての世界は量としてみられた數學的全體の世界と dem Dasein nach (B. 222) に因果關係による力學的全體としての世界の二つに分けて考へられる。自然の意味が單に前者によつてのみ成り立つならば dem

Dasein nach についての自然の統一的認識の爲に主觀と客觀、直觀と概念との類推は之を必要としなかつたであらう。

コペルニクス的轉回が主觀の働きによる對象界の形式による構成（是は所謂 intellectus ectypus であるが）であるならば其處には尙、質料の問題が殘置される。前者は主觀の構成として形式的要素が論點の中心となり、時間の知性化に伴つて、其の機能の空間に對する優位を示したのであるが、空間的表象の持つ全體的統一性の意味は、單に形式的ならぬ自然の考察に於て其の機能を先取し、空間的統一の見地を中心に世界の一體といふことが考へられてゆくのである。

註(1)　カントは直觀形式としての空間と形式的直觀としての綜合を經て構成された對象的空間（幾何學空間）とを分けて考へてゐる。(B. 160. Anm.)[1] それ故無限なる包括的空間の意味にカントの純粹直觀を考へるならば、カントの空間概念を三次元のユークリッド幾何學空間のみに限定するいはれはない。「普通の幾何學空間（ユークリッド空間）の持つ特殊なメルクマール（卽ち三次元、曲率零等）は決して純粹空間の制約とは考へられぬ」[2]といふ風にして、カントのアプリオリな空間概念が實質的には歷史的なユークリッド空間により制約されてゐるといふ說に對し、カントの立場を辯護することは可能であらう。

1) vgl. W. Gent, Die Raum-Zeit-Philosophie etc. op. cit. S. 66.

2) vgl. F. Medicus, Kants Transzendentale Ästhetik und die Nichteukldische Geometrie. (Kantstud. III, S. 261 ff.)

第一節　內と外の問題

五に外といふ關係は空間に固有なるものである。これは外延量が時間の次序に從ふといふ事によつて解消されない。

外感の形式たる空間が、それに於て見出されるものが心性（ゲミュート）であり主觀であるならば、此の樣な主觀は又別に、內感

の形式としての時間を持ち、内と外とは此の主觀に關しては、共に内であると言はねばならぬ。從つて外は此の意味に於て超越論的に内なるものと呼ぶことが出來る。(B. 370, 373) 内と外の區別は此の場合、時間に於て受けとられたものであるか、空間に於て受けとられたものであるかのいづれかである。然し外的直觀の多樣は對象によつて觸發されたものであり、内的直觀は心性自身によつて觸發されたものである。(B. 192)

同質的な直觀でありながら、内と外といふ風に區別されるのは如何にしてであるか、此の場合、區別といふことを「與へられる仕方」に於て求めてゆく場合と前述の如くそれを或る働きに基づけ(空間(外)と時間(内)との形式を待つて始めて外(又は内)は措定されるから)それらの形式が共に主觀に於て座を持ち超越論的に内であるといふ風に考へる場合とは、原理的に分けて考へなければならぬ。

前者の場合の相異、即ち自己觸發によつて與へられる内感と對象によつて觸發された限りに於て與へられる外感と、感官(ジン)の種類は明に二種であるに拘らず、カントは之を直觀又は現象として同質的なものとみなし平行的に論じ其の區別の根據を主觀の側に置くのみである。それ故「超越論的對象Xによつて空間的感官は外的直觀となる如く、内感は超越論的主觀Xによつて内的直觀となる」[註1]といふことは正しく指摘され得ようが、兩者は感官として同一視されるだけであつて超越論的客體Xと超越論的主體Xとを同一視するわけにはいかない。そこには區別がある。

カントが感性論の始めで客觀と呼んでゐるもの、即ち「明にそれ(外的直觀)は主觀が客觀に觸發せられて、客觀の直接的表象即ち直觀を得る爲の主觀の形式的性質として、從つて唯外感一般の形式として、單に主觀に於て座を有する」(B. 41)といふ客觀は明に主觀(超越論的主觀)の外に立つものであり此處に於ける主觀と客觀、内と外の問題は經驗論乃至心理主義的殘滓としては拂拭し切れない未解決の問題を含む。此の樣な客觀は超越論的な主觀に對して其のコレラーツムとして外に立つものであるから、超越論的對象であり、更に質料の叡智的原因としての物自體である。然し空間表象の成立の根柢に考へられる物自體の交互作用が直ちに空間と物自體の直接的な關係(物自體をと

りかこむ空間）を意味するとは言へまい。「我々の外といふ表現はさけることの出來ない曖昧さを伴つてゐる」（A. 373）とカントは率直にみとめながら、外的現象の意味と物自體としての外をはつきり區別してゐる。「空間に於てあるものは空間に於て表象されたもののみである」といふことを、「逆說的ではあるが正當な命題である」として注意したカントは、（A. 375. Anm.）外とは總じて經驗的に實在するものであつて超越論的には觀念的に內であるといふ立場を固執する。物自體が認識論的に無意味であると同じ樣に、非合理的な空間の「外」といふことは全く無意味である。（A. 375～376）カントの物自體の假定が全くの獨斷的實在論の要求であるといふ非難が彼に加へられなければ此の主張は正しいものとならう。然し空間を質料との關係に於て見て行かうとする限り、又空間や質料のもつ根本的な受容的性格の反面として、その原因たる物自體の作用とを考へ併せる時、質料—物自體—空間—外との間に或る種の連關があることは否めない。「超越論的意味に於て我々の外にあるであらうところの或物が我々の外的直觀の原因であることは認められるかも知れぬ」（A. 372）とカントは述べてゐる。此の樣な問題が內含されてゐる限り、內と外との原理的な對立は一先ず超越論的に內なる意味に解されたけれども、それは問題を一歩押しやつただけの樣に思ふ。此の場合超越論的對象として全く我々の外にあると考へられた或物は、カントの空間概念の根柢に豫想される物自體と及びその觸發作用である。其の場合物自體の存在樣式が直ちに空間的とは言へまいが、物自體の觸發が、多數實體の交互作用として成立つならば（此の點に於てカントの物自體の世界はライプニツのモナッドと構造上の類似を持つ[註(2)]）それは空間的場所に於てしか考へられないと言ひ得るのみであらう。此の樣な非合理的な空間が假令前提され得たとしても、それは外の外（それによつて外感の形式としての空間が觸發されたる所の、其の外なる對象が、それに於てある空間）であるが故に內であるといふ說明は[註(3)]、我々がカントの空間を世界乃至質料との關係に於て考察せんとする限り妥當ではない。

註(1)　H. Cohen, Kants Theorie der Erfahrung. S. 313.

註(2) ライプニツのモナド論の構造はカントの就職論文に於ける可想界の構造に類似してゐる。それは更に批判期に於けるカントの形而上學的前提をなしてゐる樣に思ふ。

註(3) 和辻哲郎氏「人格と人類性」二八頁以下

此の樣な解釋には超越論的客體Xが又自我自體であることが先行する。「第三アンティノミー」を介し「實踐理性批判」との連關に於て物自體を考へる限り、それは自然な見方であるが、カントの物自體は自我自體の意味にのみ解消し切れないものを有してゐる。

所詮思惟的主觀の單なる表象以外の何ものでもない所の延長體を以て、獨立に存在するものとみなすデカルトの立場を「粗略なる」(A. 392) 二元論として排斥批判するカントが、果してかかる二元論（それは又本來内と外との對立をも意味する）に對して、原理的解決の道を與へてゐるであらうか。「思惟體と延長體との相互性に關する惡評高き問題は、凡ての臆測されたものを除き去ると全く次の點に歸著する——如何にして思惟的主觀一般に於て外的直觀すなはち空間の直觀（空間の充實、形體及び運動の直觀）は可能的であるか。」(A. 393)（傍點は原文ゲシュペルト）との問に對して、カントは明に「此の問題に對して解答を見出す事は何人にとつても不可能である」と述べてゐる。然しながら此處に時間と空間（從つて内と外）の平行關係が持つ意味を適用すれば、批判的制限を加へることも、又問題を廻避する必要もなかつた筈である。

物自體を自我自體としてのみ考へず物自體の持つ作用性格を空間の持つ受容的性格との連關に於て考へるならば、認識論的自我の場合、その相關者としての超越論的對象が殘される樣に、それに伴はれる空間的性格は、自我の自發的な作用性格からは全く取り殘されたものとして、其處には時間と空間との平行關係はもはや保たれないが如くである。此の事はカントに於ける内と外（時間と空間）との認識論的問題を全く形而上學的な對立にまで持ちこむことであり、之がカントの批判的意圖に反することは言をまたない。それ故カントは内と外の問題が含むこれらの諸前提に對し解決を與へない。そして外的現象を超越論的對象に歸し、兩者の關係についての知識の缺陷を指示するに止り、

(A. 393) 我々は唯カントから、兩者が「しかく異種的ではあり得ないだらう」(B. 427〜B. 428) といふ消極的な答しか引き出すことが出來ないのである。

第二節　外界の實在

近世哲學の認識論が始めから內的經驗の偏重に立つ限り外界の實在證明は唯蓋然的たらざるを得ない。我の存在から出發するデカルトに於てそれと異質的に相容れざる延長的物體の存在證明は、唯感覺を媒介とするのみなるが故に結局神の誠實に訴へざるを得なかつた。マルブランシュの場合、其の叡智的延長の思想は、確かに外界の證明にはならうが、其の觀念の源泉は尙神に置かれたものである。ライプニッに於ては外界の實在と其の空間論とに明らかな矛盾が指摘される。[註(1)] 又是等の諸說と關連して大膽なる一面性を示したのがバークリの外界否定であり唯我論の主張である。そしてカントが觀念論々駁として直接に先づ第一に批判の對象としたのは、かかるバークリ流の觀念論であり、然もカント自身傳統的な形而上學的實體の否定を以て、批判の主要なる任務の一つに數へてゐるのである。

本來形而上學に屬すると思はれる外界の實在證明は、カントの哲學的立場卽ち超越論的觀念論からみて、論證さるべき必然的根據を有するであらうか。外界の實在は假令疑ひ得ざるものであるにせよ一ケの確信としてのみ處理し得るものではない。そして此處に時間空間の平行關係が經驗的觀念論の論駁を通じて外界の實在證明を與へ、他面合理的心理學への批判を含むことによつて、カント哲學に於ける原理的意義を示すのである。特に前者の場合空間は外界存在の形式として時間に先行する役目を擔ふ。

一七七〇年就職論文に於てカントは外界の實在證明を結局物自體に歸着させ、觀念論々駁は此の見地から行つてゐると考へられる。(vgl. ibid. § 11)「純粹理性批判」第一版に於ては此の立場は變つて居ない。(A. 370〜A. 371) それ故「表象の直接な知覺（意識）は同時に表象の現實存在の充分なる證明」(ibid.) になることは正當に指摘され得

やうが、知覺を以て對象の直接の結果とし、それの現前についての證明とする限り、デカルトと軌を一にし、バークリ流の外界否定を克服し得るものではあるまい。

「觀念論に反して私は主張する—我々には我々の外にある對象としての物が感官に與へられてゐる。…。此の故に我々の外に物體卽ち物が在ることを私は勿論承認する。このものがそれ自體何であるだらうかは我々にとつて全く未可知であるが、我々は物を我々の感官に對する物の影響が作り出す所の我々の表象によつて知る…」(Proleg. § 13. Anm. II) と述べてゐる場合、カントは此處に我々の外なる物自體の存在と、それの感官への作用（自然的影響として特にライプニツの內と外との豫定調和から區別せられる (B. 331)) をみとめる。物自體は此處の場合外的表象の原因として、その實在證明の根據となつてゐることは疑ひ得ない。

「第二版に於ける眞の增加、といつても單に證明方法に於ける」(Vorrede XXXIX Anm.) と、ことわつて追加せられた本題に關する「第二版」の說明には外的存在體への强き依存が現はれて來る。

合理的心理學批判から生じた一つの成果として擧げられるのは純粹に精神的實體に解消された命題からは、必然的に、誤まれる、經驗的觀念論が生ずるといふ事である。是はデカルトに發する精神的實體の、バークリ的歸結を指すものと考へられる。此の樣な觀念論に於て、自然や外的實在は精神からの整合的な推論によつては到達出來ないとカントは考へる。(B. 418) そしてカントは此の樣な觀念論の否定の爲には、自我の規定に於て常に外的に與へられた對象への關係を前提してゐる事を、更に「デカルトが確實であると考へる所の內的經驗さへも外的經驗を前提して始めて可能となる」(B. 275) ことを示してゐる。卽ち外物の現存在が證明される爲には、時間に於ける我々自身の現存在の限定が、空間に於ける外物の現存在を俟つて始めて可能とされなければならぬ。此の點からデカルト的自我實體の否定が、デカルトに於て疑はしきものとせられた外界實在の證明を間接的に行つたと言ひ得るのである。

然しながら、此の場合、感性論に於て單に主觀への關係のみが唯一の形式であるとされた外感 (B. 67) は又外なる

ものへの直接的な關係として說明される。「何となれば外感はそれ自身既に私の外なる或る現實的なものに對する直觀の關係であり……。」（第二版序言 XL）是等の說明をすべて經驗的實在論の意味にとれば、問題は一應解決されたと言ひ得る。然し、「第二版」の說明を文字通り「單に證明方法に於ける」變更とみなして「第一版」「プロレゴメナ」との連關に於て考へる時、外的表象の實在は何等かの意味に於て物自體に關ると言ひ得るであらう。前節に於て內と外の問題に對し指摘され得たと全く同樣の難點が、外界の實在證明についても妥當する樣に思はれる。そして、此の事が外感の形式としての空間の持つ認識論的意味に止らず、其の背後の形而上學的問題を豫想する時、我々は再び物自體の概念に直面せざるを得ない。

註(1)　B. Russell, A critical exposition of the philosophy of Leibniz, p.70～p.74.

註(2)　ヴィンデルバンド・淡野安太郎譯、物自體說の諸相について（岩波哲學論叢第十三卷）
彼は批判主義の實在論的要素が「第一版」より「第二版」に於て遙かに銳く强調されてゐることを指摘してゐるが、空間の諸說についても此の事は言ひ得ると思ふ、

第三節　經驗の類推

「自然」といふ場合、特にそれが形式的な數學的自然を意味せず、自然一般として dem Dasein nach に質料的意味が附加される時、前者の場合に時間の演じた役割は寧ろ空間によつて置き換へられ、時間は空間によつて浸透せられた自然的時間としての意味を有するに至る。此の質料的な自然が一なるものとして可能である爲にカントは「一なる空間」を考へてゐる。空間はそれ自身現象的なものでありながら、神の潛在的な遍在に比せられ、更に物質相互の可能的影響の根據として規定される。此の樣な空間は單に經驗的に實在的な空間としてのみ考へられてよいであらうか。

周知の如く一七七〇年就職論文の立場と批判期の立場の根本的相異は前者が可想界と可感界の二つの對立する世界に分けられ、各〻が同等の認識權利を主張し得たに反し、批判期に於ては、可想界は物自體の世界として其の認識が拒まれ（單なる思惟は可能であるにせよ）可感界にのみ客觀的な經驗認識が許され得たといふことである。そして此の様な經驗認識は、就職論文時代に於ける可想界の原理（範疇）と可感界の原理（時間及び空間）の綜合によつて成り立つものであつた。換言すれば、ライプニツに近い二世界說の立場から脫して可想界と可感界の形式や原理に、それ〴〵獨自の機能を認めながら、兩者の綜合による認識が唯一つの自然を構成すると考へるのである。兩者の綜合に於て自然が成り立つといふことは、自然には單に可感界の原理としてのみある時間及び空間の外に、可想界の形式的原理が入りこんでゐるとみなされなければならない。即ち、實體の交互作用を、その中に於て（ibid. S.8）[註(1)]可能ならしめる可想的な空間的原理が變容されて（即ち現象として）批判期に於けるカント自然觀の中に滲透してゐると考へられるのである。

註(1)　多數實體の相互關係によつて一ケの全體即ち世界を形成する可想界と空間的關係について當時カントは左の如くに考へてゐる。

一つの世界が可能である爲に、しかもスピノザ流のモニスムスに陷らない爲に、カントはそれ自身に於て獨立してゐる所の、實體を部分とする全體が世界の概念を構成すると考へてゐる。此の場合の世界の次序（オルドー）とは常に全體に於ける相互的な秩序なのであつて、個々のもつ本質は其の全體的秩序に依存する。全體が先にあつて個はそれの限定として成立ち、其の秩序の性格は空間的であると言はねばならぬ。單純實體の集合として、即ち單純なるものが完結的なる全體に先立つカントの可想界にあつても、それがまとまつて、一ケの世界を形成する爲には其の可能性の形式的根據が問はれなければならない。然しカントは此處では直接的な解答は與へてをらない。寧ろ「直觀的にみられた場合には空間と呼ばれる所の、總ての實體の此の關係そのものは如何なる原理に基くか」を問ふ。(ibid. S.16) 此の原理とは相互作用の原理であり、其の形而上學的根據は「一者」としての世界の創造者なのである。然しながら可想界に於ても尙多數實體の交互作用によつて集合體を形成する限り、そして豫定調和說をとらざる限り、それに於て實體があり、それに於て實體の交互作用が行はれる所の場所が考へられ

なければならないであらう。可感界の形式的原理としての空間は、實體連結の理性的客觀的根據では無論ないが萬物遍在の普遍的必然的制約の感性的に認識されたものであるから、現象に於ける遍在性 (omnipraesentia phaenomenon, ibid. 322) と呼ばれてゐる。

經驗成立の爲には、客觀的な時間限定がなければならず、その爲には、時間の本來的な樣相としての持續と、空間に於ける實體とのアナロギーが先づ考へられなければならぬ。主觀的な時間の繼起が客觀的に前後として認識せられる爲にも單に主觀的ならぬ客觀の規則卽ち因果律が必要とせられると同じである。

カントが經驗の統一を單に「統覺」を根源とする形式的統一によつてのみ考へてゐなかつたといふことは、此の「經驗の類推」の項に於て時間の統一を統覺の持つ作用の、自己同一的な持續と結びつけないで、却つて現象に於ける基體としての實體との類推に、知覺の綜合的統一の可能性の根據を置いたといふことから、推測することが出來る。此の樣な統一は一なる空間を根柢とする一なる自然として始めて表象せられる。類推の項に於て示されたる持續は統覺と結びつき得る時間の純粹持續ではなく、我々の外なる空間に於て表象せられた實體との類推によつて成り立つのである。「持續的なるものは、私の中に存在するわけにはいかず、從つて全く私の外なるものによつて知覺可能とせられる」(B. 227, B. 275)

演繹論、圖式論に於て示された時間と空間との關係は、此處に於て逆轉し、時空の平行關係は恢復し、更に空間は時間に對し、其の機能上ある優位を持つに至る。此の事は自然の統一の觀點が自我の働きに卽して見られた形式的なものより、質料的なものへと推移してゆく過程と一致するのであつて、自我の働きを拔にした空間的表象の全體が一としてみなされるのである。そして時間は空間的に固定された（實體の持續とのアナロギーにより）又は自我の働きを拔にした外的表象の模寫的繼起[註1]として、又空間的事物の併存をまつて始めて可能とせられる同時[註2]として說明されるのである。此の場合の時間は働きと結びついた知性的なものではないから、否寧ろそれらを全く拔にしたものである

から、空間と平行的に論ぜられ、乃至、空間表象との類推によつて空間化、客觀化、對象化されたものと言はねばならぬ。所謂自然的時間である。經驗の類推に於てもカントは表面時間の樣相を根據として論を進めてゐる。(B. 219) 然し此の事は知性化といふ意味に於ける時間の優位說と合致するものではない。寧ろ類推の項に於ける時間の根柢にあるものは空間である。カントは此處に於ては、持續的なるものは私の內にないといふことを根本に置てゐる。此の事から我々は交互作用のカントの說明や原則論の一般的註を理解すべきであつて前述の觀念論々駁も此の主旨によつて貫かれてゐる。

註(1) H. Cohen, Logik der reinen Erkenntnis. S. 152 ff.

註(2) カントは七〇年就職論文に於ては繼起も同時も共に時間的なものであると考へてゐるが (ibid. § 14)「純粹理性批判」に於ては、時間の同時性を明に否定してゐる場合 (B. 226, B. 229) と、それを繼起と共に時間の關係、形式、樣相であると述べてゐる所も少くない。(B. 67, B. 219, B. 224 etc.) 斯くの如く明らかに對立背反せる意味に於て同時が時間的でもあり空間的でもあると考へられるのは同時性の持つ二義的な性格及び其の根柢に考へられてゐる「持續」の、カント哲學に於ける二義性に基く。同時を時間の樣相としてのみ、その面から考へやうとする所に、後述する如き「交互性」の範疇の難點が生ずるのである。

アナロギーの根本原理は時間の三つの樣相（主觀）と「關係の範疇」の三つの項（客觀）との類推によつて成り立つ。そして交互性の範疇にも此の事が適用され得ねばならぬ。それは時間の樣相の一たる同時と「相互的に相次いで起る」所の因果性の範疇との類推によつて成立つのである。然しながら同時は既に示した樣に單に時間的なるものではなく、更に又因果性の範疇がA→Bへの不可逆的一方的な作用の客觀的規定であるならば（經驗の第二類推は之によつて成立したのである (B. 239)）それの可逆的な相互性は如何にして理解せられるであらうか。

此處に交互性の範疇に伴はれる多くの「贊同し難き點」や「詭辯を演じてゐる樣な點」が見出されるのである。[註(1)] 此の場合問題は相互性の範疇の導入の仕方である。「知覺の交互的繼起が客觀に於て基礎づけられてゐる爲には、そし

て、それによつて共在が客觀的として表象せられる爲には、これ等同時に竝行して存在する事物の限定（die Bestimmungen dieser ausser einander zugleich existierenden Dinge）の交互的繼起についての悟性概念が要求される」（B. 257）としてゐるが交互作用的であるといふ Folge とは、同時的であると共に繼次的であり可逆的であると共に不可逆的であり、空間的であると共に時間的である。卽ち二重の因果律としてしか說明されぬ。これは時間の見地を中心にアナロギーを解釋し盡さんとするカントの整合的な意圖の現れであらうが「因果律が極めて奇異なる仕方に於て應用せられ其の概念は全く止揚される」[註(2)]といふ批評が正しく指摘される。此の場合の同時とは空間を根本制約とした諸物の共在關係を示すのであつて、同時とは先づ空間的なものであるといふことが銘記されねばならぬ。同時存在に於ける事物の可逆性とは時間の秩序ではなくして空間に於ける竝置を前提としてのみ可能とされる。それ故「同時性といふことは其の根柢に於て決して時間的關係ではない。蓋し時間に於ては常に唯 Nacheinander といふ事があるのみであつて、同時的事物といふものは、時間の次元に無理に適用すれば、幾分かは垂直線的次元として考察することが出來るけれども、それに應じて同時性に對する感性的像は寧ろ空間の要素を示すものである」[註(3)]と言はねばならぬ。

註(1)(2)(3) E. König. Die Entwickelung des Kausalproblems von Cartesius bis Kant S. 330 ff. 同時がケイニとの說明する樣に空間的場所に於ける繼起する時間の會合であり、時間を直線にて表せばそれに順次に交叉する橫線によつて同時が表はされることはカント自身就職論文に於て說いてゐる所である。(ibid. §14 coroll.)

更にカントは此の樣な空間が相互作用を可能ならしむる場であるとして、かかる作用性又は可能的影響なき「空虛なる空間」を空間から區別してゐる。「實體が全く空虛なる空間によつて分たれてゐると考へるならば」（B. 259）事物が客觀的に共在する事を證明する事は出來ず「空間中の實體の共在が經驗に於て認識されるのは、實體の交互作用を前提としてのみ可能なのであり（B. 258）空虛なる空間に於ては同時的存在の經驗的認識は全く起らぬ（B. 260）

といふことを述べてゐる。

實體の相互的影響が、それに於て可能になる空間とは既に觸れた樣に、實體の可能的影響の場として、神の現象に於ける遍在に比せらるべきものであつた。空間はそれに於て、現實的事物が交互作用の範疇によつて客觀的に表象される爲の可能性の根據であり、單なる空虛空間からは明に區別せられる。

此處に物理的空間の問題が提出せられる。

第四節　物理的空間及びエーテル

純粹直觀としての空間を空虛なる空間とし、それと空虛でない經驗的な實在的知覺空間とを別けて考へた場合、交互性の場として、空虛なる空間から區別された空間は、空虛でないといふ意味に於て、經驗の對象たる知覺空間であると言ひ得るであらうか。否、もしそうだとしたならば、我々は交互性の範疇が持つアプリオリテートを經驗に對し普遍的に適用することは出來まい。此の樣な空間は、認識論的意味に於ける純粹直觀としては空虛でなければならず、然も交互作用の場として、實體と實體との連續的影響を可能ならしめる媒質的意味を持たねばならぬ。そしてそれが知覺の對象にあらざる限り、經驗的實在的なる感覺的空間と同一視されてはならない。即ち此の意味での實在空間と空虛空間（純粹直觀）の間には知覺の豫料は適用されない。

既に「純粹理性批判」感性論に於て分けられた二つの空間についての意味、即ち純粹直觀としての空間と經驗的實在的空間は「自然科學の形而上學的基礎」に於ては絕對（純粹）空間と相對空間との二つとして論ぜられてゐる。[註六一]

此の場合、相對的、可感的、物質的空間を物理的空間と名づけるならば、此の物理的空間が如何にして經驗の全體的統一として成り立つかといふことと、それ自身知覺の對象にあらざる純粹空間が如何にして可感的となり得るかといふ問題が此の物理的空間に關し提出されるのであつて、其處にエーテルの問題が生ずるのである。此の事を先に述

べた空間の媒質的意味とも關連させながら考へてみたいと思ふ。

註(1)「自然科學の形而上學的基礎」第一部定義一及び註二
vgl. W. Cont, op. cit. S. 76.

カントが遺稿に於て取り上げてゐる問題は、自然哲學より物理學への推移の問題であり、其處には、批判期に於ては現れなかつた（交互作用の原則に於て媒質の如きものとしては考へられてゐたが）エーテルの問題が現はれる。エーテルといふ、經驗的ならざる物質が導き出されたのは、經驗の全體的な空間的統一及び物理的空間の可感性についての問に對する、假設としてである。此の様な假設が純粹空間と經驗的空間との間に想定されたことは「これに於て含まれてゐる認識論的問題への反省が、超越論的演繹のテーマに對する矛盾的措定を意味」[註(1)]しないかといふことが先づ考へられる。エーテルは明に假定されたものであるが「それなくしては、物理的物體の形成に必要なる何等の連結をも考へられ得ない所の不可避的且必然的假設」[註(2)]であり、此のエーテルを缺く限り空間は決して感官の對象たり得ないのである。

「純粹直觀に於て與へられたアプリオリな空間とは、感性（ジンリヒカイト）の對象であり、經驗的に與へられたるものは感官（ジン）の對象である。經驗一般が可能とせられるには、それ故、箇々の感官對象としての空間の實在化（レアリジーレン）、即ち經驗的直觀が要求されるのである。此の様な實在化、即ち單に思惟的（コギタビーレ）な空間より感覺的（センシビーレ）な空間への、換言すれば我々の表象の外に於て實在するものへの轉化には一面に於て Uirstoff 又は Weltstoff として、同時に物質の運動する力の總體としての、エーテルの存在を豫想するのであつて、かかるエーテルなくしては空間は決して感官の對象たり得ない」[註(3)]のである。

そして此のエーテルによつてみたされ、エーテルの作用（感官への觸發）を介して空間は知覺可能となり、是が所謂物理的空間と考へられる。エーテルは知覺的對象ではないから、それを介して、經驗のアプリオリな原則が普遍的

に適用されることを少しも妨げない。「何となれば物質が（例へばエーテルを考へるやうに）その空間を何等の虚もなく全部充實しながら、然も同一體積に於ける物質量が吾々の研究し得るあらゆる物體よりも比較にならない程小さいと考へるのは不可能ではない。」（自然科學の形而上學的原理第三部）

註(1) G. Lehmann, Ganzheitsbegriff und Weltäther in Kants Opus postumum (Kantstud. 1936, S. 307 ff.)

註(2) AK. Aufl. XXI. S. 378. Lehmann, a. a. O. S. 314.

註(3) E. Adickes, Kants Opus postumum. S. 365.

エーテルは知覺の對象ではなく、個々の知覺を可能ならしめる特定の物質力でもないからそれは諸物體相互の遠隔作用（actio in distans）を妨げるものでもなく、虚空間を通じて物質が他の物質に對してなす直接作用と矛盾せず、地球と月の間隙の空間は全く虚であると考へられる。それ故エーテルは直接經驗の對象であるわけではなく「それによつて經驗が直接に可能とせられるのでもない」[註(1)] 又それは熱素（ウエルメストツフ）とも呼ばれあらゆる物質に汎通的に瀰漫し全世界空間をみたす物質であり、[註(2)] そこにエーテルと空間的全體性との關係が質料の側について問はれ、それは「イデー」[註(3)]とも呼ばれる。

註(1) E. Adickes, a. a. O. S. 384.

註(2) 1) Der Wärmestoff ist die im Raum verbreitete Materie, die nicht als in Aggregat von Teilen, sondern nur als in einem System existierende gedacht werden kann. (AK. Aufl. XXI. S. 553. Lehmann, a. a. O. S. 315)

2) Der Wärmestoff also ist die Materie als System, also Ganzes.

Der Wärmestoff ist das, was Gemeinschaft aller Materie im Raum ausmacht und für sich keines prehensibele Substanz ist. (AK. Aufl. XXI. S. 561. Lehmann, a. a. O. S. 316)

註(3) AK. Aufl. XXI. S. 378. Lehmann, a. a. O. S. 314.

エーテルは斯くしてあらゆる運動する物質の力の結合の基礎として要請され、[註(1)] かかるエーテルが普遍的に瀰漫した

空間に於て、空虛なるものの存在は許されないことになる。そして又それは、外的經驗を可能とする前提となるのである。此の樣な性質を考へ、我々が今迄辿つて來た空間の諸問題と關連させる時以下の樣な疑問が生ずる。

(1) 單に空虛ではないが、さうかと言つて、感覺的對象でもない所の、謂はば、純粹直觀と經驗直觀とを媒介する働きとして、カントはエーテルを考へたのである。此の思想は交互作用の可能性の形式的根據としての、又は、質料的世界の統一原理としての空間の持つ或る種の形而上學的性質と結びつくか。

(2) エーテルは認識論的意味に於ては不合理である。卽ち「知覺の豫料」によつては限定されぬ。然も空虛ではないから純粹直觀とも言ひ得まい。此の事はカント空間論の持つ超越論的觀念性を破り經驗的ならぬ實在性へ空間を分離させることにならないか。

(3) カントに於て空間は決して作用的な統一の形式ではない。然も空間の形式に於て統一されるものの、直接的な與へられ方が直ちに其の統一の仕方を意味するのでもない。此の事は空間の形式が主觀の中にあることの形而上學的な（單に認識論的ならぬ）根據を問はせるものである。是等のことと單に物理的な特定の力でもない、しかも、活力を有すると假定されたエーテルとは如何なる關係に置かれてゐるか。（Ätherdeduction に於て我々は「感官を觸發する能力」及び「空間の全體的原理」としての二つの意味に於て是を導いたことに注意せよ）

是等の問題を物理學のそれとして扱ふことはカント自身のよつた力學的自然觀と矛盾するであらうし、形而上學的に解決しやうとすれば一七五五年への復歸以外の何ものでもない。ここにエーテルといふ原素材（ウルストツフ）の持つ觀念性、主觀性、結局はイデーといふことが重要な意味を持つてくる。そして先に問題とした樣な性質を持つエーテルを原素材（ウルストツフ）であり、然もイデーであると考へることの矛盾がなければカントの論義は納得出來るものとなる。

註(1) Principium priorum metaphisicae nova dilucidatio, 1755 (bes. Sectio III. Cassirer Aufl. I. S. 419 ff.)

エーテルによつて媒介された世界全體とは決して Discursive Allgemeinheit ではなく（何となればエーテルに依

つて充された全體は決して集合體ではないから）して（Collective Allgemeinheit であり、[註1] 物質の絶對的全體は、熱素の概念に於て成り立つ。全體は此の場合「單一なるもの」であるからエーテルの「素材としての單一性」の强調は、[註2] エーテルといふ概念と、世界理念といふ概念とが交互に連關してゐるとみなされなければならない。然も此の様な全體性とは、可能的知覺の綜合に於て成り立つ主觀的なものである。更に此の場合經驗とは知覺の綜合的統一であり、知覺が可能とせられる爲には、常に主觀を觸發する所の運動する力が必要とせられる。是はエーテルの要請せられた第二の意味であつた。即ち運動する力の可能性の根柢に横つてゐるものと考へられたエーテルは、間接的に然も主觀的に、經驗の可能性の爲に要求せられる定言的且アプリオリな原理となるのである。

此の様なエーテルを我々がイデーと解した場合、是が時間的制約のもとに繼次的に成立つ系列に關して思惟された、謂はば形式的な總體性に關るイデーを意味しないことは明らかである。イデーとは「純粹理性批判」に於て此の様な繼次的系列の進行が、何處迄行つても停止しないといふ格率（B. 694）であり、主觀的な統制的原理であり（B. 537）又之を世界に投影したものとして世界理念といふことは言へるが、それはあく迄 focus imaginarius（B. 672）に過ぎなかつたものである。

此の様な形式の面から見られたイデーが時間的であるに反して質料の面から見られたイデーは空間的である。エーテルといふイデーは假令アプリオリではあつても、直接に我々の認識主觀の制約に關るものではなく、知覺成立の爲の質料的條件に關し先づ要請せられ、次いで運動する力を介して、かかる知覺の全體を可能ならしめるものとして假定されたのである。

註(1) AK. Ar4. XXII. S. 611. E. Adickes, a. a. O. S. 385.

註(2) Lehmann, a. a. O. S. 376~S. 317.

世界理念として質料的經驗の全體性の爲に要請されたエーテルは運動する力と知覺とを媒介するものとして、即ち

前者は外的物體に卽し、後者は知覺する主體にも關るが故に、外と內との經驗全體を統一する原理として現はれてくる。そして此處に物自體の概念が現出するのである。

Das Ding an sich ist kein anderes Objekt, sondern eine andere Beziehung (respectus) der Vorstellung auf dasselbe Objekt. (AK. Auf. XXII, S. 26.　Lehmann, a. a. O. S. 321)

Das Objekt (material) = X ist nur das Ideale der Zusammenhang. (idid. S. 86.)

物自體は此の場合經驗全體の原理との連關に於て思惟されたイデーである。

Das Objekt an sich als X enthüllt sich als "das blosse Princip der synthetishen Erkenntnis a priori, welches das Formale der Einheit dieses Mannigfaltigen der Anschauung in sich enthält (nicht ein besonderes Objekt)." (AK. Auf. XXII, S. 20.　Lehmann. a. a. O. S. 322)

卽ち我々は外なる運動する全體としての質料と內なる知覺の全體なる經驗とが、此の樣なエーテルの媒介によつて空間的世界の全體を構成してゐると認めてよいであらう。

そして此處に外なるものと內なるもの、觸發するものとされるものとが、エーテルを介して客體と主體との關係として成り立つのである。然し此の事が直ちに、其の根柢に於て、更に物自體と自我との或る種の交互作用に迄押し及ぼされるといふことは言へまい。

我々は先に Ätherdeduction に於て二つの意味を認めた。其の一つの意味卽ち物理的空間の成立に際して、それと絕對空間とを感覺作用に關し媒介する力がエーテルであり、原素材であり熱素であるとしたならば、此の樣なエーテルの假定そのものが、空間の實在化を意味しないかどうか、更に檢討してみる必要があると思ふ。蓋し空間論成立の根柢に豫想される其の形而上學的根據(觸發作用)をも含めて、世界全體の質料的統一の原理としてのエーテル—空間を考へ、それ自身假定せられたアプリオリな要請に止るにせよ「物質の根柢に豫想せられた力」の面が强調される時、

その獨斷論的主張は直ちに空間の全き形而上化を意味するであらうから。

然しながらエーテルの存在證明は、空間が實在する客體ではないといふことに基いてゐる。[註(1)] さらにそれが主觀的性格を擔ふことをカントは強調する。[註(2)]

空間が實在する客體ではないといふ限りに於て存在を要請されたエーテルは、その運動する力を介して觸發せられた感覺をまつて始めて實在化されるに至つた空間の根據であると言へやう。エーテルが空間に先立つといふ意味は此の場合、全體としてのエーテルが先立つ（これは目的論的性格を擔ふと言はねばならぬが）のではなくして、觸發するものとされるものとの機能的な面（力）に於て謂はばある種の原因として先立つのである。知覺空間の「觸發せられる」といふ初次的な受容的性格は之に基く。

それ故 Ätherdeduction に認められる二つの面（作用の面と目的論的なイデーの面）は嚴密に區別して考へなければならぬ。何となれば、然らざる場合觸發作用（心身の相互作用）と全體的統一とを可能にするカントのエーテル論は直ちにライプニツ流の豫定調和論となつてしまふであらうから。

イデーと物自體との關係はカント哲學の内部に於ても充分に考へられるし、原因と目的概念の混同は又常に嚴密に禁じられてゐる。「純粹理性批判」に於けるそれの關係についてはコーヘンの解釋がある。[註(4)] 又空間の見地を中心とする物自體と世界全體との連關に於てはエーテルをイデーとして兩者を媒介させることにより可能となつたのである。

註(1) AK. Aufl. XXI, S. 246. Lehmann, a. a. O. S. 328.

註(2) E. Adickes, a. a. O. S. 383.

註(3) ライプニツの豫定調和の體系はこれによつて本來、肉體と精神との協同の說明を志したものであるが、同時に一般に種々なる實體が共同して一つの全體を形成するといふ可能性の說明を目指すものである。（一七九一年ベルリン、アカデミー懸賞論文に於けるカントの豫定調和論に對する說明と批判參照）

註(4) H. Cohen, Kants Theorie der Erfahrung, S. 468～S. 480.

彼の物自體の說は其の中に超越論的對象をも含み、無制約者、限界概念更に統制的原理、目的概念たることを述べ結局之をイデーと見なすのである。

目的概念としてのエーテルを質料的經驗全體の原理とすれば Weltsystem と空間との關係が容易に說明されるといふことは、「純粹理性批判」に於ける統制的原理としてのイデーが目的論的性格を有してゐる、[註(一)] といふことからも容易に推測せられるが、其の場合、エーテルが媒介した空間の知覺作用、卽ち主觀との間に於ける交互作用（觸發）の關係は、全く抽象せられるか、豫定調和說に戻るかの何れかであらう。我々は其の場合、空間が外的對象によつて觸發せられた限りに於て可能とせられるといふ、空間の受容的な性格の反面を窺ひ得たのであるが、エーテルの媒介作用が單に物理的空間に止る限り、それを以て、直ちに、純粹空間の成立の根柢に此の種の交互作用を類推することは不可能であらう。エーテルを介して此の樣な一種の因果連關と目的概念とを結合させやうとする事は、カント哲學の原理的な破摧なくしては不可能であり、物自體の觸發作用をエーテルによつて充された空間に於て認める事も、空間の形而上化以外の何ものでもない。

エーテルの演繹に於て要請された二つの意味の矛盾は、一般にカント哲學に於ける理論的イデーの持つ消極的な中間的媒介者的性格にもよるであらうが、其處に包藏される諸問題が、カントの認識論的解決によつては處理し切れない傳統的な形而上學的諸問題に根ざすが故であらう。

註(一)「純粹理性批判」辨證論附錄 (B. 670 ff.)

此の附錄に見られる目的論的な思想より判斷力批判への推移を考へ、其處に論理的整合性を見出さんとするものにコーヘンやシュタトラーの解釋がある。

H. Cohen, a. a. O. S. 504 ff.

A. Stadler, Kants Teleologie und ihre erkenntnistheoretische Bedeutung (bes. II Absch.)

カント哲學に於て、其の成立の背景に豫想せられる形而上學的要素は、多く物自體の名によつて現象の彼岸に追ひ

やられ、しかも其の體系上不可避なる前提として考へられてゐるのである。此の事は本論に於ける空間論の説明に於ても明らかである。我々はそこに、單なる認識論の範圍を越えて、カントが直面せざるを得なかつた形而上學的諸問題、及び、それと何等かの意味に於て或る種の連關に立つ物自體の概念とを見出したのである。

神、世界、實體、質料、存在等々……古來形而上學の中心的テーマは一として物自體の概念と無緣なるものではない。然も之をことさらに取上げることは、カントを古き形而上學的實體論へ復歸せしめる危險を伴ふのであるが、其の歴史的背景を考慮することなしに、カントを理解することも又不可能であると言はなければならない。

一なる空間に基づく質料的世界の一體といふことは、エーテルを導入することによつても、空間の形而上學的實在化にはならない。此の事はエーテルといふイデーの持つ目的論的性格によつて、然してカント哲學に於ける目的論の持つ反省的性格によつて辛じて除去し得たのである。

× × × × × ×

限定するものと見るか、限定されるものとみるか、その何れをも含む矛盾的性格が、カントに於ける時間及び空間なのであつて、それは形式となり又質料となる。蓋し時間及び空間は、カント哲學に於て文字通り感性の形式なのであるから。

兩者が平行的に論ぜられ得る限りに於て、時間も空間も共に主觀に座を持つ直觀形式であり、又感性的質料の意味が強調せられる。それ等はともに單なる現象に過ぎず、これは又、カント哲學に於て重要な體系的意味を有するものである。

然しながら、其の各〻が持つ固有なる形式的意味や質料的あり方を追及して行けば、兩者の關係は破れざるを得ず、意識に於けるはたらきと結びついた時間の、認識に於て占める優位があり、他方此の樣なはたらきから離れて、寧ろそれ以前に於て、根源的に與へられ、自然の質料的全體を統一する原理としての空間があり、我々はそれを「取

り殘された」空間の諸問題として主題的に追及したのである。

此の事には一つの前提がある。此の様な空間の解釋とは全く對照的に、時間を自我の働きに卽して構想力として知性化しそれを「ペルゾン」の概念に結びつけるといふことである。そして更に、カントに於て、自然と自我の對立を、空間と時間の對立相異に引き戻して考へる事が出來ないであらうかといふことである。時間の知性化が或る意味に於て成り立ち得たとしても、自體的な意味に於ける空間概念が成り立ち得なかつたことは、「與へられる」といふ空間の原理的事態に根ざすが故であり、我々はその形而上學的根據を痕跡として認め得たに過ぎない。更にカント哲學の持つ二元論的性格は、自然と自我、延長と思惟の古き獨斷的な實體論的二元論を意味しないからでもあらう。それ故、空間の形而上化は自我をも含めた質料的統一が單に經驗的なものに止る限り不可能であり、エーテルとは單なる現象統一のイデーに過ぎない。然も尙、純粹持續として知性化された時間の持つ意味と、働きを拔にした空間の持つ質料的あり方は全く對比的と言はねばならぬ。

此の事は空間を中心とした實體的形而上學が否定せられ、自我を中心にした主體的な形而上學が作り上げられてゆく歷史的なプロセスに於てカントを、その轉回點に置くことである。然しながら、その何れをも取り殘された痕跡として、或るひは、可能的萠芽として、含んでゐるのが在るが儘のカントの歷史像なのであつて、カント解釋者が一元論的意味に於て之を徹底せしめ、カントを「超へ」カントを「轉釋」(uninterpretation) することは、其の解釋の方向に於て所謂現代的意味を持ち得るとしても、それによつてカント思想は割り切れるものではない。時間と空間との相異をことさらに强調し、之を二元論に近い對立乃至分裂的關係に於て見ていこうとしたことは、此の様な轉回點に置かれたカント哲學の、然もその固有な二元論的性格を歷史的な背景と意味づけに於て、特に際立たせる爲に用ひられた方法に過ぎない。(了)

(一九五一・三・一)

(筆者　東北大學文學部哲學大學院學生)

Remaining Problems of Space in Kant's Philosophy

by Shigeru Aoki

According to Kant, space is a form of intuition as well as time, and this parallelism has an important meaning in his system. But, while time as a function of imagination has some priority to space in our cognition, space as an original form of sensibility presupposes something metaphysical in its background.

In general, while we find modern meaning in space conceived as a form of intuition in the direction of its immanence and subjectivity, Kant's conception of space still includes metaphysical or physical elements and cannot be solved only from the view-point of ideality and formality. Thus there remain some problems, which the present writer has tried to discuss.

The problem of external and internal sense and the problem of how to prove the reality of the world as external to us, are not merely cognitional but metaphysical. Kant merely points to the correspondence between 'things in themselves' and the subject of cognition, and says, "this is a question which no human being can possibly answer". He can only indicate the gap in our knowledge that lies open between the thinking subject and external intuition. Likewise, in regard to the relation of soul and body, he merely answers negatively: "consequently, what lies at the basis of phenomena, as a thing in itself, may not be so heterogeneous".

There remain unsolved problems, e.g., the question of how a community of substance is possible (cf. the paragraph of the Analogy of Experience) and the consequent problem of the ether-physical space. Even though such problems do not necessarily destroy the original character of the Kantian space, they involve nevertheless some difficulties which can not be easily solved by Kant's philosophy alone.